
優秀そうに見えて無学な学生による、科学的に見えて非科学的なファンタジー考察

神崎はやて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優秀そうに見えて無学な学生による、科学的に見えて非科学的なファンタジー考察

【Nコード】

N4265S

【作者名】

神崎はやて

【あらすじ】

ごくごく普通の少年、進藤 潤と、そのクラスメイトでちよつぴり(?) 変わり者の浅田 晴菜は市内の高校に通う高校2年生。

無学なくせに妙に理屈っぽい晴菜と、彼女の?理屈病?に付き合わされる潤の、馬鹿らしくも微笑ましい学園生活が今日も始まります。

注:文中で晴菜が繰り広げる考察はあくまでも高校生の知識で展開

できるものであり、必ずしも科学的事実に基づくものではありません。ご了承ください。

また、文中では実在するファンタジージャンルの作品の考察を行います。作品のイメージを汚されたくない方は、即回れ右をおススメします（前書きの段階で登場する作品を発表します）。

第1説 不思議な不思議な生き物、ポケモン（前書き）

あらすじに書きました、注をあらかじめご覧になってからお読み下さい。

それでは、すたーとです。

第1説 不思議な不思議な生き物、ポケモン

「私は思っんだ。ポケモンというのは、つくづく不思議な生き物だ」と

「また唐突だな」

いきなり、ある意味では今更な問いを放ってきた女に、俺は呆れ顔でそう返事を返す。

俺の名は進藤 潤。市内でもごくごく普通の高校に通う高校2年生。そしてそんな俺の目の前で、仏頂面で唸っているのは俺のクラスメイトにして友人の、浅田 晴菜だ。

高校1年の春だったか、最初の席順でたまたま隣同士だったというだけの仲。

しかしその後、何の因果か妙に付き合いの多かった俺達の仲は、いつの間にか世間一般で言う？腐れ縁？に数えられるものへ変貌していた。

口調が示すとおり、中々に変わり者で、理屈っぽくて。

それでいて 否、だからだろうか。どこか、とても人間臭い。

その腐れ縁が呟いた言葉に、心中では「また始まったか」と思いなから、俺は溜め息をつく。

「え、何？ どうしてそう思うわけ？」

半ば投げやりにそう訊き返した。

いつものことなのだ、彼女が？こう？なるのは。

「いや、だってそうだろう。よく考えてみる、生き物にも関わらず、電気や炎を体内に蓄えて、放出するんだぞ？ 明らかにおかしいだろう」

「まあ、そりゃそうだが。けどそんなの、」

「ファンタジーだから、と言いたいんだろ？」

晴菜の言葉に、俺は頷く。

まあこの程度で、この、無学ながら妙に理屈っぽい少女の考察を止めることなど出来ないことくらい、充分すぎるほど解っているが。

一応は、断っておく必要はあるう。

そうでなければ、非現実の空想物
今で言えば、ポケモンこと？ポケットモンスター？が
大層滑稽で、みょうちくりんな可哀相なもので終わってしまうから。

そんな俺の苦勞を知ってか知らずかは解らないが、晴菜は「だがね、」と言葉を切って考察を続けた。

「例えば、このピカチュウ。これは問題だ」

「いや、どの辺が？ 黄色くて可愛いじゃないか」

ピカチュウといえば、もはやポケモンの代名詞ともいえるほど有名になったモンスターの1体。

アニメーションでは主人公の相棒になっているし、活き活きと動き回る愛くるしい姿は未だ多くのファンを持つ　　と、いうのはあくまでも私見だが、ともかくそれほど有名な(獣?)であるそのの、どのあたりに問題があるのか。

「甘いな、潤。いいか？　図鑑によれば、こいつは頬に電気袋なるものを持っていて、身の危険を感じた際に放出するとある」

「うん、まあ、確かにそうだな」

そんなことを書いてあった気がしないでもない。

図鑑はそっちのけで、俺は専らモンスターを強く育てる側に重点を置いていたから、覚えていなくても当然か。

というより、少女らしくキャラクターの可愛らしい上っ面に魅かれるのではなく、これほど捻くれたところに興味を抱く辺り、さすが晴菜と言わざるを得ない。

「で？」

「鈍いな。だから、ありえないだろう。もしこれが本当なら、ピカチュウはある種の発電機に似た構造を体内に持っていることになる……否、それだけじゃない。放電すると言っている以上、それをこいつは外部へ放出する器官を持っているわけだ。それも、人間がシグナルとして利用するような生ぬるいものじゃない。10万ボルトだぞ、10万ボルト。そんな高電圧を流すなんて、体内に絶縁体で

も仕込んでいない限りまず不可能だ」

「絶縁体って、ゴムとかか？」

「そう、ゴムなんかはよく知られているな。とにかく、そのように高電圧を遮る何かがあれば、あの電気鼠の電気は自分を感電死させて終いだよ」

んな物騒な。

「でも、現に放電してるじゃないか」

「そう、そこだ。放電している限りは、溜め込んだ電気をどうにかして体表辺りまで送り込む必要がある。だが先に言ったとおり、ただ流すだけではあまりの高電圧に感電してしまうから、きっとそれを安全に送り込む機構があるに違いない。……………有体に言ってしまうえば、電線のような」

「身も蓋もないな、おい」

あんな可愛いマスコットキャラの中身が、よりもよって電線だらけなんて嫌過ぎるだろ。

「後、もう1つ不思議なものがある」

「まだあんのかよ……………」

晴菜の考察大会 俺は、勝手ながら理屈病などと命名させていたのだが 俺は、勝手ながら理屈病などと命名させていたのだが、た
まに暴走して2つ以上を展開することもある。 は、大抵1つの話題で終わるのだが、た

何をどう思ったのかは俺の知るところではないが、今日の発作は少なくとも多い方に当たってしまったようだ。

俺が呆れている目の前で、少女は更なる疑問を述べた。

「ずばり……………進化の石だ」

「……………あー」

確かに、あれはポケモン世界の中でも結構なレベルに入る不思議アイテムかもしれない。

多くのポケモンは、レベルアップ　　要するに、強くなることで進化を果たし、より雄々しく、より強く変貌する。

そもそも、生物学的にもかなりの年月を要するはずの？進化？という現象がたった数秒で完了してしまう時点でポケモンの異常性がよく解るが、それはさておき。

要はその、多くのポケモンの進化のパターンの？例外？となるものの1つが、この？進化の石？なのである。

その名のとおり、特定のポケモンに使用することでそのポケモンを進化に導くことが出来るといふ、世にも不思議な石なのだ。

確かに、生物を進化させるといふその石は、晴菜の興味を引き出す魅力を持っているかもしれない。

「アニメを見ると、進化の石は触れるだけで効果を示している。即

ち、触れるだけでポケモンの皮膚組織から体内に入り、何らかの作用を促す因子のようなものがあるのではないかと推測できるわけだ」

「何らかの………因子？」

「例えば………特定の情報を、DNAに追加したり、書き換えたりするとか」

「んなアホな」

思わず声に出してしまった俺を許して欲しい。

DNAの改竄とか そんなことが普通に生きてるやつに唐突に起こって、ただで済むものなのか？ 所詮高校生の俺には解んねえけど。

しかも進化っていうくらいだし、全身に起こってるわけだろう？

そう思うのだが、晴菜の方は至極真面目な答えだったらしく、不満げに頬など膨らませている。

「アホだとっ！？ じゃあ、お前はどう思うんだ！」

「いや、俺だって解んねえよ」

そもそも、理屈なしのファンタジーを、超常現象的仮定にも基づかず現代科学で考察し始めた時点で、既に無理が生じていると思うのは俺の気のせいかな？

するとその俺のいい加減な答が気に入らなかったのか、あちらさん

は膨れっ面のままこちらをじっと睨んでいる。

それを見て、漸く彼女の発作が収束したと思った頃を見計らって、俺は溜め息をついて肝心なことを言おうと口を開いた。

「おい、晴菜」

「……………な、何だ」

「どつでもいいけどよ、お前……………」

負けは負け、だからな？」

「うっさい、馬鹿っ！」

ぶいっ、と頬を染めてそっぽを向く晴菜の手の中では
ゲーム画面で晴菜の設定した？ポケモン？の主人公が、目の前を真っ
暗にさせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4265s/>

優秀そうに見えて無学な学生による、科学的に見えて非科学的なファンタジー

2011年10月6日14時19分発行